

と観客はその強さに舌を巻いた。この大会は当時大阪球場特設試合場で行われ、大観衆が詰め掛ける人気だった。同時開催の選手権優勝は勿論曾根康治主将。

明治大学柔道部は今まで文武両道の素晴らしい人材を数えきれないほど輩出し、柔道界をあらゆる面で支え続けている。多くの古豪校が凋落する中、今日も常に優勝争いにからみ次々に国際選手を送り出していることも凄い。百年の歴史のそれぞれの場面で、躍動し輝き続けた関係各位に最大限の敬意と祝意を表したい。

優勝の歌

尾崎 透

(共同通信社)

取材の過程で明治というとまず思い出すのは平成元（一九八九）年、小川直也選手が全日本選手権で初優勝したときのことだ。

表彰式後の会場で、OBの方が音頭を取つて「優勝の歌」を歌い始めると、現役の選手はキヨトンとした顔をして、歌えずにいた。「何だ、お前ら知らんのか」。こちらも呆然とするOBの方々の顔を見て、ああそう言えば、明治は低迷していたな、とあらためて思いついたのだ。

筆者は弱いなりに大学まで柔道をしていたので、もちろん以前から明治の強さと伝統は知っていた。学年が同じ藤原敬生選手の勇姿は高校時代から見ていたし、絢爛たる過去の実績も把握していた。しかし、昭和五十七年に共同通信に入社して柔道の取材を始めたころは、

既に卒業していたとはいえ山下泰裕先生が全盛期。現役学生では斎藤仁選手、正木嘉美選手が覇を競う状態などもあり、明治の影はやや薄かつたよう気がする。学生チャンピオンは何人も輩出し、団体戦でも上位に進出したのにそんな印象を持つたのは、明治は強いという思いがあつたせいだろう。

明治が復活を始めたのは、原吉実先生が戻られてからだつたと記憶している。その象徴が小川選手だ。昭和六十二（一九八七）年に取材したドイツ・エッセンでの世界選手権は今でもよく思い出す。大会前、宿舎で当時日本代表監督の上村先生を囲んで話を聞いていると、そこを通り掛かつたのが小川選手だつた。

「どこへ行くんだ？」と上村先生が聞くと「ちょっとプールへ」。正木選手が二階級に出場することになつていたため、気楽さもあつたのだろうが、大会直前とは思えない余裕のある受け答えに、上村先生は「おれはなぜあいつが水着を持ってきているのかが分からん。宿舎にプールがあると知つたとは思えないんだが…」と苦笑していた。

そして、小川選手の本当の大物ぶりを知ったのは数日後だつた。腰を痛めた正木選手の代役で無差別級に出場すると、あれよあれよと勝ち進んだ。がばつと左の奥襟を取り、前へ前へと出て欧洲の強豪を追い詰める柔道は、それまでの日本の重量級とは全く違うものだつた。大会前に練習相手をしていた早稲田の小野沢弘史師範が荒い息をはきながら「あいつは化け物だ」と言つていたのも当然だつた。優勝後のひょうひょうとした表情も印象的だつた。それから二年後に、前述したように全日本選手権で優勝。その後の活躍はあらためて語るまでもないだろう。

もう一人のキー・マンは吉田秀彦選手だ。中学時代から勝負強さには目を見張るものがあった。インターハイで団体優勝した後に、当時世田谷学園を指導していた吉村和郎先生に、過去のエースと比べてどうかと質問すると「一

番頼りになる。本当にとつて来てほしい時に取つてくるのが吉田だ」との答えが返つてきた。柔道の強さもさることながら、天性のリーダーシップを感じさせた。

その吉田選手を軸に平成三年に全日本学生優勝大会で十九年ぶりに優勝すると、現役・OB一体となつた「優勝の歌」が日本武道館に響き渡つた。現場を離れて何年にもなるが、そろそろまた会場に行つて、「優勝の歌」が聞いてみたい。筆者は明治の柔道部とあの歌が大好きだ。

忘れられない優勝大会での歓喜

谷戸忠司

(読売新聞社)

柔道を担当するようになつたのは昭和六十一（一九八六）年から。以来、約十年の間にバルセロナ五輪、三度の世界選手権などを取材した。柔道を取材する限り、明大柔道部との関わりは避けて通れない。全柔連の神永昭夫専務理事、上村春樹ヘッドコーチを始めとした当時の指導者はもちろん、全日本の強化選手にも明大生は少なくなかつた。駿河台の道場に足を向ける回数も、他大学の柔道場に比べると多かつたようだ。

実を言うと、私は明大の柔道場にあまり良い印象がない。暗い、石の階段を昇つた先にある道場の古さもさることながら、柔道部員の応対が決まって無愛想だったからだ。「部外者が何の用か」と言わんばかり（と、私は思つた）。同じ都内の柔道場でも、日体大の方が明るくて記者への接し方も優しく、明大道場に行くのが苦痛だったこともあつた。

ただ、すごいと思ったのは板壁に掲げられた歴代部員の名札。何枚あるの

か。初めて見たとき、その数の多さ、往年の名選手の名前に圧倒された覚えがある。

明大柔道部は長い歴史を持ちながら、途切れることなく日本柔道界のトップを維持しているという点で、他校の上を行くものがある。私が取材をしていた頃は、全日本選手権で小川直也が一時代を築いていたし、中量級では吉田秀彦という五輪金メダリストを輩出した。カナダ・ハミルトンの世界選手権で園田雄二、幕張では秀島大介が世界王者になり、アテネ五輪でも阿武教子が金メダル、泉浩が銀メダルを獲得した。

ただ、明大柔道と問われて私が真っ先に思い出すのは、こうした名選手の試合ではなく、団体戦である。平成三（一九九一）年の全日本学生優勝大会。明大が十九年ぶりで優勝した大会だ。

最近は、柔道も団体戦の報道は軽視されがちだ。学生優勝大会も主催の毎日新聞はともかく、他紙は特別話題の選手でも出場しない限り、十数行の記事と記録だけ。写真も掲載されない。読売新聞の場合は、記録も載つていなことさえある。ところが、十年以上前の優勝大会は、スポーツ新聞を含めて各紙とも大きく扱つていた。読売でも本記のほかに四〇一五〇行のサイド記事があり、ペテラン記者によるコラムまであった。記録は準々決勝から。決勝は内訳も載せている。

その平成三年の大会。戦前は「東海大の三連覇で決まり」とも言われていた。重量級の全日本強化選手が揃い、関係者は「どこからでもポイントが取れる」と。その牙城に決勝で敢然と立ち向かったのが明大だつた。

「これが団体戦の戦い方」という見本を示したような試合だつた。勝てる相手には、一本勝ちなど、大きなポイント差で勝ち、不利な相手には粘つて引き分けに持ち込む。結果は一一一だつたが、明大は二年・松本昌広の一本勝ちで、東海大は有効による勝利。負けはしたが、両チームで唯一の一年生・鉄谷竜三は、四〇キロも重い強化選手の山田利彦に「一本負けでなけれ

ば、一本勝ちが生きる」と踏ん張った。実力では数段勝る岩田桂司と対戦した岡部善隆が、バテバテの体を振り絞るようにして引き分けに持ち込んだ試合、優勝を決め、監督と選手が体をぶつけるようにして抱き合い、歓喜の涙を流した光景は、今でも私の脳裏に焼き付いている。

明大の選手は大舞台に強いと言われる。確かに、実力以上のものを出して勝った試合を幾度となく目にした。月並みの表現ではあるが、これが伝統校の為せる技なのだろう。明大は試合場でOBや指導者の応援がすごい。選手もこれに奮闘して力を出し切る。伝統に培われた師弟の信頼関係という点で、明大は他校の追従を許さないものがあるようだ。それが長年の栄光に、そして、結果的に私を含めた「余所者」に対しての無愛想につながるのかもしれない。

受け継がれる明治の勝負魂

滝口 隆司

(毎日新聞社)

プレスセンターに戻ると、東京本社からのグラフアクスで送られてきた。平成十二(2000)年九月二十日に行われたシドニー五輪の男子九〇kg級三回戦。出来上がった紙面の連続写真を見た同僚記者たちが驚嘆の声を挙げた。カルロス・オノラト(ブラジル)の内股を必死にこらえた吉田秀彦の右ひじが反対側に折れ曲がっていたからだ。

現場では全日本柔道連盟の上村春樹・強化副委員長(当時)が「あんな滞空時間の長い内股はめつたない。背負い投げと同じ高さぐらいまではね上げられた」と話していた。背中を畳につけまいと右腕一本で体を支えた吉田

のひじは完全に関節が外れたが、それでも耐えていたのだ。勝負を捨てない恐るべき執着だった。すぐに病院へかづぎ込まれた吉田のコメントは「非常に残念です。今は頭が真っ白で何も考えられません。本当にすみませんでした」という短いものだった。最後の五輪。壮絶に散った吉田の一瞬に、柔道家の闘争心が凝縮されていたように思えてならなかつた。

吉田は当時三十一歳、明治大柔道部の監督を務めていた。現役選手を兼ねながら「体力の低下を感じている。それをカバーするのは経験と精神力しかない」と語っていたのを思い出す。そして、シドニー五輪から一年後、「闘将吉田」の精神は後輩たちに受け継がれていた。日本武道館で行われた第五十回全日本学生優勝大会でその一端を垣間見た。

国士館大との決勝は、二対二のまま大将戦に突入した。明治大は体重九〇kgの増村一人。一方の国士館大は一三〇kgの市ノ渡秀一が畠に上がった。

この試合が引き分ければ内容差で明治大の優勝となる。増村にも「引き分けに持ち込めれば」という気持ちがあったという。両者「指導」の後の開始二分すぎ、増村は技をかけるふりをして逃げる「偽装攻撃」の反則で「警告」を受けた。

そこで監督の吉田が立ち上がり、「攻める。足を使つて攻めるんだ」と叫んだ。リードした市ノ渡は守りに入つたのか徐々に動きが鈍り始める。「監督に教わつたのは、勝負は気持ちで下がつたらいかんということです」という増村は必死に技をかけ続けた。残り四十四秒、審判が市ノ渡に「警告」。そのまま引き分けた瞬間、明治大の三年ぶりの全国制覇が決まった。

アテネ五輪を前にした平成十六年六月のこの大会でも、執念ともいべき戦いを見せられた。主将は五輪代表の泉浩。五輪を二ヶ月後に控えた大事な時期だ。負傷を避けるために欠場しても誰も責めはしなかつただろう。「この大会は四年間の集大成。欠場する気など最初からなかつた」という泉は、準々決勝の中央大戦で右わき腹を負傷するアクシデントに見舞われた。しか

し、ケガの苦痛に顔をゆがめながら続く準決勝の東海大戦に臨み、泉だけが勝利をもぎとった。チームは敗れたものの、先にある五輪のことなど考えず、目の前の相手だけに向かっていった泉の戦いには、見る者を圧倒する気迫があつた。泉はアテネの準決勝で世界王者の韓国選手を破る金星。決勝ではグルジアの選手に大外刈りを返されて銀メダルに終わつたが、果敢に攻め続けた柔道には、負けを恐れない「明治の勝負魂」が宿つてゐるようにも見えた。

創部百年。格闘技に大切な何かが、この部には受け継がれているように思える。それは、腕が折れても畳に背をつけない勝負への執着である。明治にきれいな柔道は似合わない。最後のブザーが鳴るまで食い下がる姿勢に、明治柔道の美学がある。

魂の明大柔道

(柔道ジャーナリスト)

木村秀和

私は明治大の柔道を「本番に燃える魂の柔道」と思つてゐる。だから、記事を書くときにそんな形容詞が必ず入る。

これは長い間取材し、見てきた中で裏切られたことはない。劣勢と言われた時こそ、明治大は奮起し、持つてゐる力を極限まで発揮した。

つい最近では平成十六（二〇〇四）年の学生優勝大会。明治大は準決勝まで進出し、最後は力尽きて、八年ぶりに優勝した東海大に敗れたが、戦前の予想では國士館、東海、天理、中央大に次ぐ五番手ぐらいの戦力だった。実際、東京予選では中央大に一一本で敗れている。しかし、本番ではその中央大を三一三の代表戦で下しての四強進出だつた。

平成四年、明治大は全国大会に優勝したが、この時、東京大会は何と準々決勝で東海大に敗れている。この大会を取材した時に、明治の選手に本番への決意を聞いたことがある。今でも強く印象に残つてゐるのが、その時の選手達の言葉だ。異口同音に「本番を見て下さい」「うちは優勝大会が目標ですから：」「東京で負けたって、どうと言つことはありません。これまでもそうですから」と全然負けたことに消沈はしていなかつた。

本番では前評判の高かつた天理大を〇一〇の代表戦。決勝は東海大を一一の一の内容というぎりぎりの勝利で栄冠を獲得した。

その当時、在籍していたのは佐々木伸也、秀島大介、大瀧賢司、松本昌広、中嶋一也、鉢谷竜三、山本兼治ら。一方の天理大には篠原信一、真喜志慶治、養父直人がおり、東海大には中村佳央、山田利彦、窪田茂といったその後、内外で活躍する、全日本でもトップクラスの選手が揃つていた。

こんなケースはいくらでもある。平成三年は東京大会八強で、本番は優勝。同様に、平成十年は三位で本番は優勝。平成十三年も東京三位で全国は優勝した。

明治柔道にとつては、その時のメンバーが軽いとか、選手に過去の実績があるとかないとかは全然問題ではない。問題になるのは、時に臨んで妥協することや弱気になることだ。技術は精神的なスタミナで対抗できる、と言うのが明治柔道の基盤となつてゐる。だから、特に団体戦になると、明治は気迫十分に相手にぶつかって、実力以上の力をこれまで発揮してきた。

明治の選手達の気力は伝統の「一本取り稽古」（レギュラークラスが相手を代えながら「一本」取るまで稽古する）から生まれる。実戦稽古と言つても良い。明治は柔道部員が少ないので効率が良い。突つ立つて見てゐる選手はいない。出来ないと言つた方がよいかもしれない。

結果として、選手は目一杯練習をし、鍛えられていく。妥協のない稽古は、例えば大学の先輩が後輩と練習している時も発揮される。先輩の技に、後輩

が故意に飛ぼうものなら先輩から大目玉をもらうという。お互に非妥協と徹底性を厳守しながら緊張関係のある稽古を続いているのだ。

明治の道場は今は新校舎に移ったが、以前はJR御茶の水駅から三分の古いビルの一角、五階にあった。かね（直角）を二つ組み合わせたようななんとも表現しづらい道場で、周囲の羽目板には先輩達の汗と、ぶつかつた時にこすれた跡が染みついていた。

飾らない、泥臭さがそこには漂っていた。ここから、神永昭夫（元全柔連専務理事）、上村春樹（全柔連強化委員長）、川口孝夫（国際柔道連盟審判委員）、小川直也（元世界チャンピオン、現格闘家）、吉田秀彦（五輪金メダリスト、現格闘家）らの明治OBは巣立つていった。

そこに立つただけで、伝統と激しさ、厳しさを感じさせた。だが、今はもうその道場もない。先輩から後輩へと受け継がれた魂の明治柔道は、実はこの道場の所産でもあった。それだけに、新道場にあって明治の柔道がきちんと受け継がれていくかどうか若干の不安も残る。杞憂に終わることこそ私の願いではあるが。

確固たる柔道スタイル

三浦良久

（時事通信社）

伝統を継ぐ者のプライド

山口大介

（日本経済新聞社）

私は明大の出身（一九九四年卒業）で、柔道部の増田洋一君と同じクラスでした。小川直也さんの練習相手を務めていた彼が、「先輩は世界で一番強い。人の関節を折るなんて簡単なことだから、他の格闘技の選手にも負けない」と、目を輝かせて話していたのを、いまでも覚えています。そんな私が

柔道の取材を担当するようになつてから四年もたっていない。その程度の取材歴では大河のような歴史を誇る明大柔道部について多くを語るなど、無論、かなわないことである。それでも、わずかな期間に明大出身の柔道家を取り材する機会に恵まれたのは幸運だった。棟田康幸、泉浩、矢崎雄大、そして阿武教子である。

いずれも五輪や世界選手権で日の丸を胸に戦った選手たち。優れた柔道家としての「心技体」を備えているのは言うまでもないが、それとは別に彼らには背骨を貫く共通項のようなものがあつた気がする。名門らしからぬ反骨心、たくましさ、そして、己を知る心とでも言おうか。

マスコミの世界に入つて柔道担当となり、全日本柔道連盟の上村春樹強化委員長、秀島大介監督らのOBの方々、阿武教子さん、棟田康幸さんらの現役選手にお世話をなつてているというのには、不思議な縁を感じざるをえません。吉田秀彦さんをはじめ、泉浩選手ら、明大柔道部出身の皆様を取材して思うのは、それぞれの方が確固たる「自分」をもつておられるということです。目の前の結果に一喜一憂するだけでなく、常に理想とする姿に自身を高めていく強い意志を感じます。だからこそ、しっかりとした柔道スタイルを持つ選手が次々と輩出され、少数精銳の部が維持されていると信じます。

昨年はアテネ五輪で、阿武、泉両選手のメダル獲得に感動を与えてもらいました。今後も明大選手の活躍に触れることができれば幸いです。

身長一七〇cmそこそこで最重量級で奮闘する棟田に限らず、アテネでメダルを獲得した泉や阿武もその階級ではすこぶる小さい方だろう。海外選手と並んだ表彰台の記念撮影で、頭一つ小さい彼らの晴れ姿が印象に残っている。そんな体格のハンディをものともしない技量や精神力を備えているのが、私の知る明大の選手たちだった。

例えば、アテネで輝いた阿武と泉。阿武はパワーはもちろん、立ち技もそれほど切れるタイプではなかったと思う。それでも、組み手やフェイントの巧みな技術を積み重ねることで世界のトップに君臨し続けた。加えて、明大に紅一点で飛び込んだ意志が壁を乗り越えさせた。

泉を初めて見たのは四年前の学生大会。当時二年生の泉は東海大や国士館大といったライバル校の選手に対し、「ここでは書けないような激しい言葉で対抗心をむき出しにしていました。その柔道センスは誰もが認めるところだが、アテネの準決勝、世界チャンピオンで巨漢の黄（韓国）を延長で破った一戦のように、負けじ魂こそ彼の真骨頂だったように思つ。

アテネの代表はつかめなかつたが、棟田は小さい体を巧みに利用してしたたかに世界の強豪を畳に這わせてきたし、「僕には技の切れやセンスがない」と繰り返す矢崎は、己を知り、寝技を磨いて生き残ってきた。

彼らに共通するたくましさを生み出したのは何だろうか。柔道界随一の伝統を誇り、多くの五輪メダリストが巣立つた伝統校である。全国の高校からエリートが集まり、彼らを他校がうらやむような卒業生による分厚い支援もあるはずだ。だが、明大柔道部というと、私は何よりもあの狭い道場を思い出してしまふ。

東京・お茶の水の古い明大校舎の一つの上階に居を構える道場。二年前に移転改築されるまで使われた、不格好な形の道場は特に印象的だった。少人数精銳で部員も少ない。他の強豪校で見られる広さ十分の道場、百人を超える部員が一斉にけいこする莊厳さに比べると、どことなく持たざるもののが風情

も漂う。もちろん狭い道場はその象徴の一端でしかないが、「明治」の看板に不釣り合いな不自由さと、伝統を紡ぐ者としてのプライドが好選手をはぐくんできた両輪なのではないか。

強くなるということ

久保 健一
(NHK)

私は番組「プロジェクトX」を作るため、のべ半年ほど、明大柔道部を取材させていただきました。この取材を通じて、私自身大きな影響を受けましたが、常に考えさせられたのは、「強い」ということの意味でした。力の強さ、精神の強さ。強さにもいろいろあるようです。実力ナンバーワンと言われる選手が、ころつと負けるのが勝負の世界。そんな時に言わわれるのは、「まだ本物の強さではない」との言葉。ならば、本当の強さとは何なのか。突き詰めていくと、そもそも勝負に勝つことは別次元の概念のような気もしてきます。

明大柔道部には、間違いない「強い」空気が漂っています。ここで百年に亘つて追求されてきた「強さ」がどうなものなのか、私は「本物の強さ」を体现した一人の選手を追うことで、必死に考えました。

私が神永昭夫氏の取材を始めたのは、一枚の写真がきっかけでした。偶然に手にした冊子に、職場で働く神永さんの様子が写っていたのです。机の上で書類を眺めるその姿は、はるか年下の私が言うのも何ですが、真面目で快

活な好青年。スポーツ選手の特有のすがすがしさを感じました。清らかさに魅せられ、さらに新聞社を訪ね、ネガを片つ端から見せてもらうことにしたのです。

小学校の時、ほんの少し柔道をかじった私は、ヘーシンクという伝説の選手の名前と、東京オリンピック無差別級決勝戦の写真を記憶していました。残念ながら、神永さんの顔は記憶にありませんでした。恐らくヘーシンクの巨体に覆い隠されていたのだと思います。

ですから、初めて見る神永さんの写真の数々は新鮮でした。神永さんの表情は、厳しいものでした。特に東京オリンピック直前、練習に打ち込む写真は、研ぎ澄まされた刃のようでした。しかし深く印象に残ったのは、数枚の写真にある、笑顔でした。職場で底抜けにはじける笑顔。この人になら何でも許してしまおう、そう思わせるくらい魅力的な笑顔でした。「この人は、あのヘーシンク戦をどう乗り越えたのだろう」、それを無性に知りたいと感じ、取材にのめり込みました。

真っ先に、愛弟子の上村春樹さんを訪ねました。上村さんに尋ねたかったのは、指導者としての神永さんが何を伝えようとしていたのか、ということでした。

上村さんは、神永さんの思い出をいくらでも話してくれました。神永さんに初めて会った時は緊張して頭が真っ白になつたこと、初試合で絞め落とされた時にかけてくれた言葉、必死でその技を觀察し歩き方まで真似したこと、オリンピックで勝ったときに初めて褒めてもらつたこと、亡くなる直前の遺言…。上村さんは、「尊敬」とか「憧れ」という言葉を一度も使いませんでした。多分、そんな言葉は当たらないのでしょうか。「神永先生」という呼び方に、その思いが凝縮されていたように思います。

私は失礼を承知で訪ねました。

「神永さんは、ヘーシンクに負けたことをどう思っていたのでしょうか？」

神永さんは終生、敗戦については「悔いはない」と答えています。それは本心なのだろうか？

上村さんは、少し考えてから、こう言いました。「負けて悔しくない者はいません。しかし『悔しい』と口にする自分は許せないと思います」

勝負における勝ち負けと、「本物の強さ」との分岐点は、何だかこの辺りにあるような気がします。晩年の神永さんの写真を見ると、表情は柔和ですが、奥に厳しいものを秘めていると感じます。

神永さんのことを、最も私に教えてくれたのは、柔道部で同期の小林敏邦さんでした。無類の酒豪ですので、私は酔い潰されながら、思い出をお聞きしました。小林さんと神永さんは、意外や読書仲間でした。「二人で酒を飲む時は、柔道の話はしない」と決めていたと思います。私の記憶に妙に残つたのは、「神永さんは勝海舟が好きだった」というお話をした。勝海舟は、遂に一度も剣を抜くことなく幕末の動乱を生き抜いた人ですが、その極意をざつとこう書いています。

「死地に入つたら、まず勝とうとか、生きようとか思わないことだ」

この文章を読んだとき、ふと思いました。既に勝負の世界を引退していた神永さんは、何を思い、この文章を読んだのだろうか。なぜ勝海舟に惹かれたのか。

奥様によれば、神永さんは、いい言葉を見つけると、手帳に丹念に書き留めていたそうです。座右の銘は「得意端然、失意泰然」、得意の時でも正しくあり、失意の時でも泰然としている、という意味だそうです。私ははつとしました。神永さんの笑顔に感じた一点の厳しさは、神永さんが生涯、自分を修行の身に置いていたからなのだと、その時初めて気がつきました。艱難辛苦の中で、心が揺れなければ人間ではありません。神永さんと例外ではなかつたはずです。しかし神永さんは、一言の言い訳もしませんでした。オリンピックで敗れた翌日も黙々と仕事をこなします。その神永さんが、心の

中に勝海舟の格言を噛みしめていた姿を想像すると、わずかな心の揺れが見えるような気がします。

神永さんは「武芸者」という言葉をしばしば使っています。生涯をかけ、修行を課し続けたその生き様は、すさまじいまでに鍛練されており、まさに「本物の強さ」に圧倒される思いがします。

この神永昭夫という人間が、生涯の基礎を築いたのが、明治大学柔道部での四年間でした。楽になつたと言われる現在ですら、四年間の柔道部生活を全うするのは並大抵の忍耐では済まないことは、練習を見ればたちどころに分かります。創部百年。この柔道部を卒業した人間が千名を超えることを思うと、言いようのない感慨を覚えます。

明治魂詰まつた「四畳半」

竹園隆浩

(朝日新聞社)

エレベーターのない階段を五階まで昇り詰めた道場で、真っ先に目に飛び込んでくるのが「四畳半」だった。

いつの頃からそう呼ばれてきたのはわからない。だが、変形道場の一角をなすほぼ十六畳の空間は、間違いなく明治大柔道部を語る中で忘れられない思い出の宝庫だ。ロッカーが割り当てられない部員には脱衣所であり、荷物を置く場所。練習中はトレーニング場で、サブ道場。ケガで休んでいる部員のたまり場でもあった。

OBや部員、練習に来る外国人らの柔道衣が多数天井から釣り下がり、帶や包帯の束が並ぶ。トレーニング用のバーべルとダンベルも。いつも五、六

人は人がいて、主力選手やOBが試合にそなえて調整する時は、十人以上にもなる。乱取り中に飛び込んでくる一人を組み合つたまま中央に押し戻すのも、ここに「住人」の仕事。家にたとえるなら、道場の中央はリビング。四畳半はさしづめ、台所か。まさに汗と涙がにじんだ「生活」の場だった。

当時の私は一年生から「四畳半の主」とあだ名を頂いていた。腰とヒザに負傷を抱え、稽古を休んでばかりだったからだ。代々、各学年に一人ぐらいは「主」がいる。下級生だと稽古中にハーデトレーニングが課されるのが常。私の場合「腕は大丈夫だな」と言われ、腕立て伏せやバーベルを延々とやらされた。「キツかつたら、早くケガを治せ」の先輩たちの言葉に、思わず返事をしていたのを思い出す。

「見取り稽古」の言葉もここで覚えた。必ずいらした小林敏邦先生に「この四畳半からはいろんな選手が見える。気の強いやつ、逃げ腰のやつ、技の切れるやつ、受けの強いやつ、自分がどんな選手を目指すか。考えながら人の稽古を見るのも稽古」と言われた。全柔連の強化合宿があり、現役の山下泰裕、齊藤仁両氏の稽古ぶりを生で初めて見たのも、この場所だった。

大学の助監督だった上村春樹先生からは「一人打ち込み」を教わった。私は高校時代には大外刈りと払い腰しかできず、「お前の足の長さでは外国人には掛からん」と一喝され、体落としと大内刈りを指導して頂いた。畳の上に白いチョークで足の位置を書き、スマーズに技に入れるように柱に向かい、込んでくるのが「四畳半」だった。

人より上にいくには三倍、一番になるには四倍」と説かれた。

私は大学で入れ違いになる小川直也君が一年生の頃、全員の稽古が終わった後に当時の原吉実監督と二人三脚でバーべル、スクワット等のトレーニングをして、畠に汗の水たまりができていたのも懐かしい。

稽古中、道場の中央では気合と指導陣のギーク以外はほとんど聞かれないと、この一角にくるとOBや上級生が言葉をかけてくれる。学生大会の勝

ち負けだけではない。常に世界を目指す厳しさと暖かさ。あの狭い空間にはそんな「明治魂」が詰まっていた。

ただし、柔道衣を管理していた一年生には心底許せない存在も。窓から入ってくるハトである。洗濯した白い柔道衣にファンを落とされた時は、O.B.や上級生の怒った顔が浮かんで震え上がる。ホウキで追っかけ回すのだが、懲りずに何度もやってくる。沖縄出身の同級生が「ハトは平和の象徴なんてウソ。焼き鳥にして食つたろか」と、怒鳴っていたのは本気だったと思う。

トッププランナーの矜持

小泉欽司
(朝日新聞出版サービス)

明柔の人たちと話していると、トッププランナーとして走り続けていることへのプライドを感じことがある。明治大学柔道部の成績が低迷していた時期にも、このプライドは失われることはなかった。これは決して悪い意味ではなく、意地も根性も矜持も失われつつあるような現代に最も必要なことではないだろうか。

終わりに本書刊行が出来たのは、まず第一に、昭和五十七年に『明柔』が復刊されて以来、ねばり強く歴史資料の掘り起こしに努めてこられた小林敏邦編集長の尽力、(株)アーバンセキュリティの村井正芳社長の編集者としてのセンス、このおふたりの貢献が大なるものであったことを記しておきたい。

明治大学柔道部百年の歴史のなかで、最もはなばらしいことのひとつが、戦後、学生柔道が復活した時からの大躍進である。

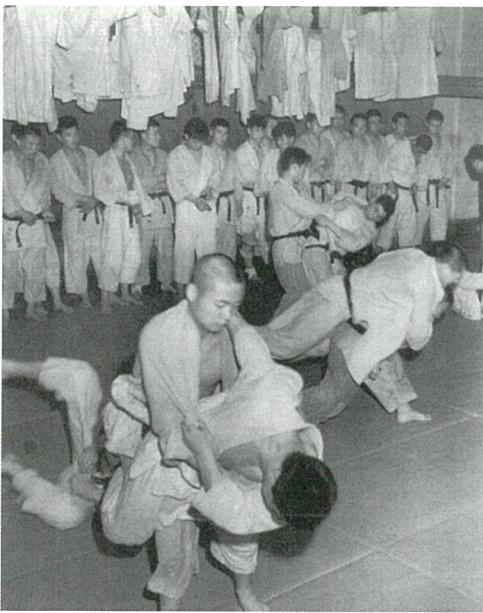
國破れて山河あり。

これより先、国民の多くが、敗戦にうちひしがれ、その日の糧を得るのに汲々としていた時代、いち早く、学生柔道復活への動きを始めたのも明治大学であつた。

ここに掲げた戦後の地下道場の練習風景の写真を見ると、決して豊かではなかつたが、好きな柔道を通して、一生懸命生きている人びとの時代の雰囲気が伝わってくるようだ。それがどこかで、戦後復興を果たしつつある日本の自信につながつてゆく。

明治大学柔道部は、しかし、「強いばかり」にとどまつてはいない。その後の歴史をみると、学生柔道界のトッププランナーとしての責務を自覚し、果

たし続けている。



記念館地下道場での練習(昭和28年)

協力団体

講道館

全日本柔道連盟

全日本学生柔道連盟

全日本実業柔道連盟

写真提供

朝日新聞社

ペースボール・マガジン社

明治大学

資料提供

講道館

日本オリンピック委員会

ブレジデント社

岩波書店

参考文献

『嘉納治五郎』講談社

『嘉納治五郎大系』本の友社

『柔道教本』三省堂

『現代柔道論』大修館書店

『論説柔道』不味堂出版

『柔道名鑑』柔道名鑑刊行会

『柔道大辞典』アテネ書房

『国史大辞典』吉川弘文館

『明柔会々報』(第一回、第二回)

『明柔』(名年版)

『柔道』(名年版)

『月刊武道』(一九九六年一月号)

『ブレジデント』(一九八〇年一月号)

『柔道新聞』柔道新聞社

『全日本柔道連盟50年史』全日本柔道連盟

『実業柔道40年の記録』全日本実業柔道連盟

『実業柔道50年の記録』全日本実業柔道連盟

『神永昭夫の軌跡』全日本実業柔道連盟

謝 辭

明柔会会長
渡辺政雄

吾が明治大学柔道部は、明治三十八（一九〇五）年創設され、今年平成十七（二〇〇五）年百周年と言う記念すべき年を迎える事が出来ました。これも偏に、大学当局、先輩各位、並びに明大柔道部を愛して下さった皆様方の物心両面にわたる御指導と御支援の賜物と、ここに深く感謝すると共に、厚くお礼申し上げます。

柔道部百年の道程は、決して平坦なものでは無く、幾多の苦難と、変遷がありました。中でも特筆すべきは、戦後の混乱期に他大学に先駆けて一早く柔道部を立ち上げ、昭和二十六（一九五二）年学生柔道復活と共に、第一期黄金時代を築き、その後多くの名選手を輩出して今日に至った事です。

この柔道部の基礎を構築し、名門校としての地位を確固たるものにして下さったのが、葉山監督、姿師範のお力であります。

特に、姿先生は、師範として、又明柔会（OB会）会長として、その生涯を現役として通されました。

葉山監督の清濁併せ呑む大きな包容力と、姿先生の純粹で一途な情熱が、柔道部のバックボーンになつていてると確信しております。

両先生は柔道部中興の祖として、功績は大なるものがあります。

「ローマは一日にして成らず」。先輩が築いてくれた、この輝かしい歴史と伝統を次の百年に、更に成長発展させるべく現役、OB一丸となって邁進しましょう。明柔会も、部員が各大会で優勝出来るようその環境づくりに専念致します。

なお四半世紀の永きにわたり、我々を御指導下さいました百瀬恵夫先生が、この三月末をもつて大学を定年退職され、柔道部長を退任することになりました。本当に永い間お世話になり、ありがとうございます。最後に、百年史編集並びに情報を提供して下さった皆様に心から感謝申し上げ御挨拶と致します。

次に、戦後の一時期、GHQ（連合国軍総司令部）の命により、学生柔道が禁止されていた時代がありました。その禁止令を解く為、復員された柔道部の先輩が中心となつてGHQと交渉し、昭和二十六年に学生柔道が復活した事（宇和島、山崎先輩談）であります。その際の吾が柔道部の先輩の尽力に敬意を表します。

学生柔道復活後、日本の柔道が急速に海外に普及発展しました。この普及発展には、学生柔道出身者、就中、明大柔道部が大きく寄与したと言つても過言ではありません。

編集委員会



委員
小野瀬雅幸
(株)ニコニコ

委員
上村春樹
(全日本柔道連盟)

副委員長
村井正芳
(株)アーバンセキュリティ

委員長
小林敏邦
(明柔会)



編集顧問



委員
小泉欽司
(朝日新聞出版サービス)

委員
竹園隆浩
(朝日新聞社)

委員
重松裕之
(JR東)

明柔 明大柔道部100年の軌跡

2005年3月26日発行

発行——明治大学柔道部 明柔会

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台1-1
明治大学体育科内
電話(03)3295-4489

編集協力——朝日新聞出版サービス
〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
電話(03)5540-7669

印刷・製本——ダイコロ株式会社
有限会社 渡辺欣勝堂

